

## &lt;書評&gt;

## The Routledge Course in Japanese Translation

Yoko Hasegawa

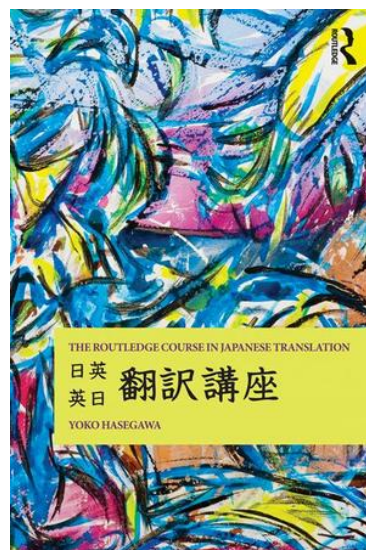
(Routledge 2012 年)

Pages: 358

ISBN: 978-0-415-60750-0 (Hardback)

978-0-415-48686-6 (Paperback)

978-0-203-80447-6 (eBook)



評者 田村智子(日米会話学院)

本書は、今年初めに出版され、Routledge の A Course in Translation シリーズの一角をなす教科書であり、主に米国等における大学の学部および大学院生の「上級日英・英日翻訳クラス」のための教科書、という位置づけとなっている。

著者は、カリフォルニア大学バークレー校、東アジア言語文化学部の日本語学の教授で、同学科の日本語教育の主任である。2001 年に同学科において”Translation: Theory and Practice”という講座を立ち上げた当時は、同種の講座がどこにもなく、独自の教材を、試行錯誤を繰り返しながら作成し続けることを余儀なくされ、その結果の集大成が本書である、との前文から始まる。その記述に裏付けされるように、その内容は著者自らの長年の経験・観察に基づいた鋭い洞察に満ち、体系的かつ実践的な力作となっている。特に「日英」翻訳教本としては、本書のレベルやその体系的な内容は、これまで類書がないのでは、と思われる。

全体は Introduction を含め 8 章から成る。第 1 章冒頭で、L2 習得における「翻訳練習」の位置づけの変遷が述べられている。第 2 次世界大戦前後から米国における外国語教育では、L2 は L2 のみを用いてルールは演繹的に学ぶ oral communication が主流となり、L1 を用いた「翻訳練習(従来の grammar translation method)」が長らく L1 interference の主犯格扱いされ続けたこと、しかし「正確さ」より「意思疎通」を最優先し、適確に表現できない事柄に関しては avoidance も可能である L2 のみを用いた(L1 を使用しない) L2 習得における壁を打破する鍵が、実は「翻訳練習」にあること、が述べられている。さらには「翻訳演習」が L2 のみならず L1 の言語感覚の鍛錬に多大に寄与し、異文化のより深い理解につながる、等が歯切れの良い英語で記述されている。そして translation の定義、translatability、translation direction (L1 から L2、L2 から L1 への訳出の理想と現実、学習的見地からの意義)、translator competence (必須技能)の解説へと続く。抽象的な議論の展開ではなく、本書全体で計 107 問にも及ぶ豊富な英訳・和訳の練習問題を課しながら、具体的に論点を解説する、という手法をとる。

第 2 章、第 3 章はそれぞれ Kinds of meaning I と II、第 4 章 Discourse genre、第 5 章 Understanding the source text、第 6 章 Translation techniques、第 7 章 Translation studies、そ

して最後の第 8 章が Translation Projects となっており、意味論、談話分析を主軸とした体系的・包括的な「日英・英日翻訳理論」の教科書に仕上がっている。日英・英日の翻訳において常に問題となる分野の論点が網羅・整理され、前述のように、学習者が練習問題をこなしながら、理論を一つ一つ具体的・実践的に学ぶことができるようになっている。その練習問題もジャンルが多岐に渡り、内容も新鮮で面白い。最後の 8 章では、実務翻訳に向けたアドバイスや具体的な仕事の手順を、これも練習問題を課しながら、その重要ポイントを解説している。

第 1 章の Kinds of meaning I の副題は、Propositional meaning (Proper nouns, Polysemy, Synonymy, Hyponymy), Presupposed meaning, Expressive meaning, Indexical meaning (Indexicality, Phatic communion, Register)とあり、一見言語学用語の羅列に見えるが、その点も著者の意図するところである。「翻訳スキル」の習得でも「翻訳理論」の探究でも、教える側、教えられる側は、論点明確化のため、最低限のメタ言語共有が必要である、としたうえで、これらの用語を全て、各章で分かり易く定義、解説している。演習の現場で日々痛感するのは、訳出文の問題点をいかに効率的かつ明確に指摘し、訂正を行うか、ということなのだが、このような体系的メタ言語の共有は、それを多いに助けてくれる。比喻としては不適切かもしれないが、本書は、部屋中に散らばっていた物や洋服を見事整然と収納箆笥に納めてくれる感がある。

現場におけるもう一つの悩みは、課題を毎週こなしていくことで学生の英訳(≒英語)のスキルが少しずつでも向上していくこと自体に意義はあっても、往々にして個々の演習が断片的になり、体系的な「日英翻訳理論」の学習までに手がまわらないことなのだが、本書を使用することが、この問題に対する1つの解決策となるかもしれない。

最後に、日本における教育現場で本書を使用する際に考慮すべき点を述べる。まず、target audience の微妙なズレである。本書はあくまでも米国等で英語を L1 (あるいはかなり高いレベルで英語を L2) とする学部および大学院生、それも日本語が最上級レベルの学生を対象としているということである。結果、日本語を L1 とする学習者の視点からではない議論も含まれている。とはいえ、これはこれで両言語および文化の違いを客観的に学べる機会にはなる。関連して、著者は授業で常に L2 から L1 にのみ翻訳させたということで、練習問題も常に日英・英日の 2 種類がペアとなる。(理由として著者は、授業の目的はあくまで「翻訳」の演習であり、TT が L2 の場合に頻発する種類のエラー添削が授業の目的ではないから、と述べている。しかし、英語が完全な外国語である、日本語を母語とする学習者に「日英翻訳」を教える日本の教育現場においては、主たる目的はあくまで L2 の習得となるので、本書のようなレベルの練習問題の添削作業にはそれなりの覚悟が必要であろう。) また、本書の英文が簡潔かつ明瞭とはいえ、毎回、「英訳 (あるいは和訳)」の宿題に加え、比較的高レベルの「リーディング」を課すことになる点にも注意したい。練習問題の難度からしても、最低 TOEIC800 程度、願わくは 900 程度以上の学生を対象とするのがベストであろう。もう 1 点、練習問題はどれも著者厳選の、宿題としては理想的なものばかりなのだが、全て最後に解答(訳例)が載っているので、授業で使用する際には、その扱い方を事前に決めたり、ひと工夫加えたりする必要がある。逆に言えば、本書は最上級レベルでの「日英・英日翻訳」の理想的な「独習書」とも成り得る。「流し読み」用ではなく、全学期を通してじっくり消化すべきたぐいの、骨太の教科書である。